



富岡町生活復興支援センター内  
「おだがいさまセンター」事務所風景

役場機能を置く郡山市に市内3ヶ所を含め県内計13ヶ所ある応急仮設住宅団地の中で最大規模287戸、435人が暮ら

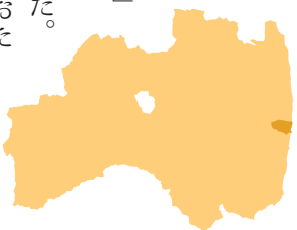
を送っている。6,200人が避難生活を送っている。

春、夜になるとライトアップされた桜のトンネルが印象的で、多くの観光客で賑わいを見せていた富岡町は現在、原発事故により全町民1万5,600人が避難の中にあり、いわき市に約5,300人、郡山市に約3,500人、その他県内約600人、県外に約2,200人が避難生活を送っている。

当初隣村の川内村へ避難し、避難区域拡大に伴い多くの住民が2次避難を強いられ、郡山市にある福島県施設「ビッグパレットふくしま」へ向

富岡町民の多くは昨年3月12日に

す富岡町仮設住宅 富岡町生活復興支援センター「おだがいさまセンター」の（以下センター）の取り組みを取材した。地元の言葉では、「おたがいさま」と使っていたが、センター名に特徴を表し町民の記憶に残るように「おだがいさま」と濁した。



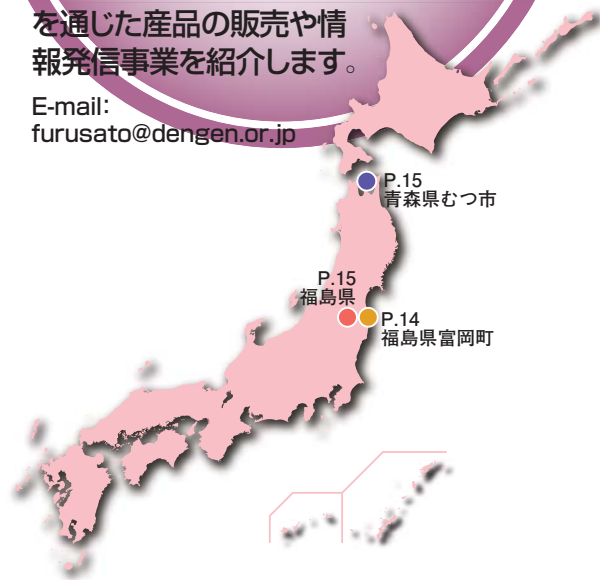
福島県富岡町

# 電源地域 復興トピックス

## 被災地の自立促進支援の動きと産消交流

このコーナーでは電源地域各地の地域復興に向けた話題を取り上げています。今回は困難な避難生活を強いられる被災者の自立促進支援事業や製品の販路拡大支援事業、それに首都圏との交流を通じた製品の販売や情報発信事業を紹介します。

E-mail: furusato@dengen.or.jp



### 助け合いで取り戻す 町民の絆と自立

多くの町民にラジオを聴いていた

多くのおだがいさまFMを聴いていた

その様々な取り組みを紹介する。町民に生の声を伝えようと、震災発生からちょうど1年後の今年3月11日、センター内に「おだがいさまFM」ラジオ局を開局した。番組は毎週月・金曜日の午前8～9時は「おだがいさわやかモーニング」、午後7～9時は「おだがいさまラジオランド」、土曜日の午後1～2時は「とおか76.9(セブンロック)」を放送している。番組のパーソナリティーはスタッフ(内2名は専門)が務め、これまでサッカー日本代表の長友佑都氏や俳優の松平健氏がゲスト出演し町民へ応援メッセージを送った。

多くの町民にラジオを聴いていた

高年者でも簡単に操作できる仕様にして、町の重要なお知らせや町公式ホームページ、おだがいさまFMの放送が聴ける豊富なコンテンツを提供している。ラジオ番組を聴き逃してしまった町民がいつでも聴けるよう録音放送も配信している。



「おだがいさまFM」スタジオ

町民の交流の場となっている「おだがいさまセンター」テラス

「町民電話帳」。モデルとなったのは、東京都三宅島の噴火で全島避難になった三宅村の「島民電話帳」だ。完成までには個人情報保護の取り扱もあり、町民へ趣旨を説明し、往復は

町民の交流の場となっている「おだがいさまセンター」テラス

町民の交流の場となっている「おだがいさまセンター」テラス

町民の交流の場となっている「おだがいさまセンター」テラス



町民の交流の場となっている「おだがいさまセンター」テラス



## 未来への「じまんの一品づくり」プロジェクト バイヤーマッチング商談会を開催

福島県

がきを送付して同意を得られた方だけ公開した。町民のプライバシー侵害など悪用される恐れもあったが、離散した町民の絆を取り戻すことが一番大事と考え、富岡町長が英断した。現在、町民電話帳は1,789世帯記載し、町民同士の絆が再構築され、大変喜ばれている。

生活復興支援センターの青木<sup>あおき</sup>よこさんは語る。  
「震災から1年半が経ち、全国から支援をくださった方々のお陰で必要最低限の環境は整いました。でも、見通しの付かない避難生活、町民の中には精神的に疲労し、後ろ向きな

11月6〜7日、13〜14日、20〜21日、27〜28日の計8日間、福島県内4会場で、経済産業省の被災地復興支援事業のひとつである「未来へのじまんの一品づくり」プロジェクトの一環として、福島県内の事業者と百貨店・食品専門店等のバイヤーを結び付ける「バイヤーマッチング商談会」が開催された。  
2011年3月11日の東日本大震災以降、これまで、復興

事ばかり考える人もいます。これからは住民一人ひとりに寄り添い、生きがいを見つけ、自立を促していかなければなりません。震災以前には、なかった人・場所・ものとの出会いが町民の生きがいとなり、再建を始めている人もいます。その人が楽しみを話すことで、自分も何か始めてみようと思つちになります。町民のやりたい事を実現させるためにも、支援に携わる方々のお力添えを借りて解決していきたい」  
青木さんは自立を遂げた町民が、次の支援者となる想いを抱き、町民と一心同体で毎日の業務を行っている。

支援を目的とした商談会や販売会など、数多くの事業が展開されてきたが、「消費者が支援を目的として買うのではなく、純粋に欲しいと思えるような魅力的な商品がなければ、長期的な支援成果を上げることにはできないのでは」という意図のもとに、本商談会が開催された。  
4会場ですべ8日間、延べ55事業者が、1対1の個別面談で、バイヤーから実質的なアドバイスを受け、福島の特産品の開発・改良そして販路拡大を目指した。

## 東京下町の亀戸でむつ市が地域産品の販売促進イベントを開催

青森県むつ市

東京・江東区で最も古い歴史を持つ亀戸香取勝運商店街は、「昭和30年代」をキーワードとした、下町情緒に溢れる観光レトロ商店街として知られ、青空市、夜市など様々なイベントが企画されている。

その一角にはアンテナショップ「青森物産ショップ・むつ下北」があり、「元気むつ市応援隊」の応援プロデューサーである河野<sup>かわの</sup>崇章<sup>たかあき</sup>氏が所属する「社団法人 北のまちふるさとプロジェクト」が下北半島の産品販売と情報発信を常時行っている。

本年10月27日(土)、そうした亀戸香取勝運商店街とむつ市の共催による「むつ市のうまいは日本一! in 亀戸」むつとの遭遇」が開かれた。このイベントは、むつ市の地域産品の販売促進・情報発信のために今年から始まったもので、今回は春に続き2回目。

三方を海に囲まれ、豊かな自然を誇るむつ市は、多種多様な農・林・畜・水産物を産する食の宝庫だ。「むつ市のうまいは日本一!」はこの地の基幹産業であり、地域の食文化を育ててきた様々な食材にスポットを当て、生産現場の真剣な取り組みや流通・加工・料理などを紹介するもの。

今回のイベントでは、そんなむつ市の秋の代表的な味覚である「ホタテの串焼き」や「ぼたん鍋」などが屋台販売され、商店街にある「勝運ひろば」で開かれた津軽海峡産生マグロの解体実演・販売では、訪れた買物客の歓声が上がった。

その他、大道芸人のパフォーマンスや、京都祇園の流れをくむという下北半島最大の祭り「田名部まつり」の「祭り囃子」、ミニ山車の運行披露などがあり、むつ市の「ムチュランファミリー」と江東区の「コトミちゃん」といった「ゆるキャラ」が揃って登場して、亀戸周辺のちびっ子たちの人気を集めていた。

むつ市は地産地消運動を行っているが、同時に首都圏の消費者に向けた地域産品の売り込みにも積極的。こうした首都圏の地域と連携して「むつ市」をま



上:買物客で賑わう商店街  
下:生マグロの解体実演の様子